

# 漸雷くんの生活

人生脇役

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目が覚めたら、フレイムアームズガール(?)だった!?

これは元人間の漸雷ガール(○)と、わりと変態なマスターの日常物語。

目次

起動	1
マスター	7
セッション (1人)	10
漸雷くん、翔ぶ	17

## 起動

フレームアームズ・ガール。

いわゆる美少女プラモデルとして、フレームアームズというロボットのプラモデルの機体たちを擬人化したデザインで発売されている。プラモデルなのだから色々な人が好きに作っているものなのだが、これがかんりの人気になっているらしい。

設定は基本的になく、背景はすべて想像に委ねる、とされている。

また、アニメ化もされており、アニメにおいては、プラモデルでありながら、間接などはすべて人と変わらないように見える構造で、またAIによって自我を持っている、という設定となっている。

……と語ったが、さてここで聞いておきたい。

自分がそんな存在になっていたら、どう思うだろうか？  
しかも。

「……………あれ？この感じは……………」

ただのフレームアームズガールではなく。

「男だ、この体……………」

男の娘、というものだったら。

僕は、特段大したことのない普通の人間だと思っている。

ロボット好きでなおかつプラモデルの趣味はあるけど、それだって人並みだし、他にあまり言えることもない。

そんな僕が、ある日いつも通り就寝して、目覚めたら。

「……………ん……………」

何か、とても小さくなっていた。

ここはどうやら机の上らしい。僕が寝ているのは、固いベッド。

固い割にはけっこういい心地だなあ、と考えながら上体を起こす。

「……………あふ」

小さなあくびが口から漏れた。両手を上げてぐぐーつと伸びをしなながら、まわりを見渡す。

「んー……………」

まだ眠いのか、視界がぼやけている。閉じた両目を軽くこすり、もう一度目を開く。

「……………むむむむ」

状況がヘンすぎるので、ちよつと信じたくなかったけど、どうも本当に自分は小さくなってているらしい。

それにこの部屋、僕の部屋じゃない。机や、その他もろもろ、見覚えのないものが部屋にある。

「うーん」

とりあえず自分の体だ。

両手を見てみると、黒い手袋のようなものをしている。けっこう長くて、二の腕のほうまである。

胴体のほうを見ると、胸になんかついてる。これは……………なんだろう、ロボットの胸パーツみたいな。

体のほうは、特徴的な模様でノースリーブの、黒と灰色のボディスーツのようなものを来ている。ハイネックで、下はホットパンツくらいの丈。足はハイソックス。この丈だと……………ニーハイってやつ、かな？

正直、男の僕にはけっこう恥ずかしい格好だ。首や、胸や、背中、腕。ところどころに機械的なパーツがついてるのが気になる。これは……………なんかなあ。見覚えが……………。

「……………あ、え？そんな、まさか、まさか」

ふと思いついたことがあった。自分の姿をもつと確認したくて、きよろきよろと見回す。鏡があった。写真立てサイズ。

ちよつと上のほうだけど、いけるかな。座っていたベッドから立って、移動しようとして、後ろから引っ張られた。

「うわっ!?!」

なんか背中についてる。紐かな、と思つて振り返ってみると、ケーブルがベッドから自分の背中に伸びていた。

「……………」

よく見たら、このベッドも見覚えがあるし。

とにかくケーブルをお尻あたりのパーツから引っこ抜いて、上の棚の鏡へ。だいたい自分の二倍くらい。

跳べる、かな？

「えいつ」

ひよい、と跳び上がった。普通に届いた。鏡の前に着地して、自分の姿を見る。

「……………うわあ」

果たしてそこにあったのは、フレームアームズガールそのものとなった自分の姿だった。ところどころ違うし、顔立ちは僕そのものの顔の面影があるけど、もつと可愛い感じになってる。というか、これ体の基本は轟雷ガールだよな？髪型なんて黒い以外は変わらない。

「えー……………どうしよう……………」

ってことは女になってるんだろうか？

そう思って胸を触ってみたりするけど、平たい。いや、なんか柔らかい感じするけど、ちゃんと胸板って感じ。

何より、悩む僕の頭のなかで、僕じゃない何かが答えを返してきた。

——当機は男性型である——

「そ、そう……………そうなんだ……………」

男性型なのはいいけど、フレームアームズガールでそれはどうなのさ？

——当機はマスターの発注によって男性型として作られた——

らしい。というか、どうもここはアニメ版みたいな世界らしい。でも、アニメ準拠だしたらマスターとやら、何者？

というか、僕は何タイプなんだ？

——ベースタイプ：漸雷——

漸雷か。漸雷はフレームアームズの中でも好きだった機体だ。

MSGとかで色々といじったっけ。

ガールは買ってないしアニメも見てはいなかったけど、漸雷のガールはいなかったことは覚えてる。

この世界にはあるのか、それともそれも含めての特別製なのか

……。

——当機の通常型との違いは性別設定のみ——

そうなんだ。……性別かあ。体を捻ったりして背中とかもみてみるけど、基本的な違いは胸と尻かな？お尻、もうちよつとポリユームあつた気がする。

あ、そういえばスカート状のパーツもあつたな。それに、轟雷はしましまパンツみたいな特徴的な腰だった。僕のはスパッツみたいなのが感じだ。あ、横に白いラインがある。股間は……少しだけ膨らみのある造形かな？フレームアームズガールだから中身はないけど。

「……はあ」

とりあえず、自分のことはわかった。でも、けっこう不安だ。

これからどうなるか。マスターとやらがどんな人か。考えるとより不安になる。

その場に座り込んで、足を伸ばす。

「ちくしょー、なんでこんなことに」

上を見ると、普通の室内照明になんとか巨大感を感じて、怖い。膝を抱えて、顔を伏せて、まわりを見ないようにする。

あーあ、戻ってくれないかな。

とか考えながら、しばらくそうしていたら、足音が聞こえてきた。

「マスター、かな」

ドアノブがまわって、ドアが開く。

姿を見せたのは、ラフな格好の女の子だった。

「あ、漸雷！起きたの!?!」

「……うん、起きたよ」

「あれ、なんだか元気ないね」

「ちよつと、ね」

本当はちよつとどころじゃないけど、言えないかな。

「一つ聞いていい?」

「なに?」

「何で男性型?」

それを聞くと女の子は、ニヤリと笑った。

「…………聞きたい?」

「うん」

「それはねえ…………ぐふふ」

ちよつと気持ち悪い感じで笑って、女の子は言った。

「私が男の娘大好きだからなのだよっ!!!」

「うわっ気持ち悪っ」

「酷いっ!?そんなこと言う悪い子はこうだっ」

「えっ、ちよっ」

女の子に捕まれる。潰され…………ないか。案外優しい手つき。

「ふふふ…………うりうり」

女の子は左手の上に僕を立たせて、何をするのかと思ったら人差し指で僕の頭を撫でた。

「うう」

けっこう気持ちいいのがなんか悔しい。というか…………胸元、近い。

女の子の服がタンクトップ、というかキャミソールだろうか。なので、素肌が近いのだ。肌、きれいだし。

「…………」

とりあえず目をそらしておこう。なんか頬が熱いし。

「おお?照れてるの、可愛い〜」

「いいから、降ろしてよ」

「もう、仕方ないなあ〜」

とりあえず、机の上に降ろしてもらおう。

さつき寝ていたベッド、というか充電くん椅子っぽく形を変えてもらって、座る。

「…………ふんっ」

腕と脚を組んで、怒ってます、と言う感じにする。女の子が椅子に座って見つめてくるので、顔をそらして、目を閉じる。

「あは、怒ってる。可愛いなあ」

「…………」

「ところで聞いていい?」



「……………」

片目だけあけて、女の子を見る。

「漸雷って、なんか普通のフレームアームズガールとは違う感じするんだけど」

「……………」

心臓なんてないはずだけど、ドキツとした。普通と違う？というか、普通のフレームアームズガールってどんな感じだよ。

「……………マスターが、注文したんでしょ」

「そうじゃなくて、何だか人みたいに感情豊かだなあって。起動したばかりなのに」

……………そうなんだ。起動したばかりだと感情豊かじゃないのか。

話すべき、だろうか？まさか人が入ってるとは思われないだろうけど、かといって不具合だと思われて返品、人格リセット、なんてことも考えられる。嫌だな、それ。ぞつとしない。

話すか。

「ねえマスター、一つ信じられない話をしていいかな」

「え？いいけど……………」

「実はさ、僕……………」

気づいたら、漸雷になってたんだ。

マスター

「……………え?」

さすがに、女の子は驚いている。

そうだよ。普通に(?) フレームアームズガール手に入れたと思っただら元は別の世界の人だったって言われたんだ、戸惑うものだよ。

「ええと、それって何? 不具合? ホラー?」

「不具合だと何か僕が消されそう……………ホラー……………たしかにそうかも……………」

「いや、消さないけどさ……………」

「本当!」

思わず立ち上がる。

「うええ!?! いや、本当だけど……………」

「僕、怖くて……………この体だから、ラボが何かに戻されて人格リセットなんてことも考えたら……………ぐすつ」

喋っているうちに、なんだか泣きそうになってしまう。涙は出ないけど、どうも泣き方みたいなのは覚えているみたいで……………。

「ああつかわしい……………じゃなくて、そんなことしないよ!」

「ありがとう……………っ」

女の子が、頭を撫でてくれる。それで、なんだか安心してきた。

「よしよし……………ああ、困ったなあかわいい……………」

とりあえず、どうにか泣くのをやめる。

「……………ふう、落ち着いた。ありがとう、撫でてくれて」

「いいよいいよ。それより、自己紹介しようよ」

「そうだね。じゃあ、僕から。僕は……………ええと、漸雷。さつき話した通り、こうなる前も男だった」

「名前は?」

「こうなった以上、前の名前は意味ないからね」

「そう? じゃあ、私が名前つけてあげるよ」

「え?」

「もともとそうするつもりだったんだ。漸雷、じゃあほかの子と区別つかないかもだし」

「そっか。じゃあお願い」

「そうだなあ……じゃあ、ライ、でどう？」

「漸雷の雷から？ 案外被りそうだけど……まあいつか。じゃあ、僕はライ。よろしく」

「おっけー！ 私は浜離唯。好きに呼んでいいよ」

「マスター」

「名前でいいのにー」

「唯ちゃん」

「ちゃんって」

「唯」

「それでよし。よろしくー」

女の子、改めて唯はそういつてにこりと笑った。

そして、右手を差し出してくる。

「？」

握手、かな？

とりあえず、中指の指先辺りを両手で包み込むようにする。

「ふふふ、正解！ 手のひらサイズの男の娘がおおずおおずと私の指先を握る……絶対やろうと思ってたんだあ……ふへへ」

「いや気持ち悪いって」

「またしてもー！ まったく悪い子だなあ、撫でくりまわしてくれる」

「ちよっ」

また掴まれた。こんどは身体中を撫で回される。

「まって、くすぐりたい、ひいっ、や、やだっ、もうっ」

「可愛いなあもう。うりうりうり」

「やっ、あひやっ、ひひひ、くふっ、まっ、まって、くるしっ」

「苦しいく？ そんなもんFAガールにあるかいなっ」

「ほんとだっってっ」

「そうなの？」

やめてくれた。

「ひやはっ、はあ、ふう……………。もう」

「ごめんごめん。じゃあ、これ、やろっか」

そう言いつつ唯は箱を出した。開けるとなかにはランナーが。

「ん？これは……………。漸雷の武装と装甲パーツ？しかもグレーか……………」

「そう！というか知ってるの？」

「フレームアームズは好きだったから。ガールも知ってはいた」

「なら、ワクワクするでしょ」

「する」

「よおし、他にもあるよ！」

「これは、MSG」

「ふふふふー、お好きでしょう」

「好き！ブースターいいよね……………」

「強襲型いいよね……………。マントもあるよ！」

「でかした！」

「HUHHAHA!!!」

## セツシヨン（1人）

「完成っ！」

そして漸雷は完成した。というか着てる。

最初はパーツのゲート処理とか手伝おうとしたけど、なまじ体が小さいので上手く出来なかったから、途中から見えた。

それを見て唯はにやにやしてて、これが残念な美少女か、って思ってた。とりあえずマントは着ないでにおいて、ダブルバレルガン装備。

いろいろと追加装備があるみたいだけど、まずは基本的なのから。漸雷だけど、滑腔砲と履帯はつけておく。ローラーダッシュはいいものだ。

唯はどうも僕と同類のロボ好きらしく、セツシヨンベースは必須だよねー、とふたつ揃えていた。でもまだFAガールは僕だけらしい。

一体でもテストプログラムがあるらしいので、それを使う。

「フレームアームズ、セツシヨン！」

唯がスマホのアプリでプログラムをスタートさせる。

セツシヨン開始………しない？

「あれ？………ああそっか。ライ、ちゃんとガールってつけなきゃ」

「ガールじゃないし」

「セツシヨンプログラムがそういう風になってるんだって」

「えー。仕方ないな。フレームアームズ・ガール、セツシヨン」

今度はセツシヨン開始した。

フィールドはただだっ広い平原で、動き回るのが複数。

腕とかを動かしたりして準備運動。そして、とりあえず歩いてみる。続いて走る。

「こんな感じか」

次に履帯を下ろす。この辺は考えるだけで操れる。

「よし、行くぞー！」

履帯が回りだし、足裏のローラーも回って発進。

「……………けっこう速いな」

気持ちいい。左旋回、右旋回。ブレーキ。履帯だから、わりとすぐ止まるけど……………。

「ターンピックが冴えないな」

『ないじゃん』

唯がツツコミを入れてくる。

「作って?」

『もつと媚び媚びにしたら考えたげるっ』

「ええー、迷うなあ」

それはさておき、射撃してみよう。

まずダブルバレルガン。漸雷の主武器。下部に近接武器をつけられる二連装銃

単射モードで銃口を的に向けて、トリガー。

反動はそんなにないのでよく当たる。

よし、次は滑腔砲だ。

右足を後ろに下げて、右肩の砲を構える。トリガー。

ドン、と言う音と反動が来て、弾が的にあたる。

よし、次。

ローラーダッシュで左に走りながら、右の的をダブルバレルガンで狙う。

『さすがに動いてると当たりにくい?』

「だね」

滑腔砲は……………腰がフレームアームズほど回らないし、真横はキツいな。

左の履帯を逆転させて、急旋回。いったん的から遠ざかり、向き直る。

的に向かって走りつつ、滑腔砲発射。

「けっこう安定するな」

『さすが轟雷ベース』

「よし、スラロームだ!」

蛇行を始める。上半身と滑腔砲のアームで的を捉え続ける。

射撃すると、やはり外れるときは外れる。

かなり近づいたのでいったん止まって、格闘用のほうの的を探す。

「あれか」

左手にスタンナックルを持つ。ダブルバレルガンにはもともとレーザーバイヨネットをつけている。

格闘用の的に近寄り、直前で右履帯を逆転させて一回転、勢いをつけてナックルを叩きつける。

次。近くの的にダツシュ、レーザーバイヨネットですれ違い様に叩き斬る。

『手慣れてるねえ』

「このへんの動作はプログラムされてるっぽいんだよね」

ダツシュの急旋回とか、基本は。

ある程度、射撃や格闘、機動に慣れられたかな。

「よし、いったん終了しよう」

『おっけー』

セクションフィールドが光の粒子になって消えていく。僕はセクションベースからおりて、唯を見る。

「どうよ」

けっこう動けた自信がある。

「動きはいい感じだったよ〜！でもね」

「むせた？」

「そうそう！なんかス〇ロボ的なむせ方した！」

「でしょ？だからさ、お願い、ターンピック、作って？」

ローラーダツシュしているとやっぱりターンピックは欲しいものだ。だから僕は媚びることにした。

「よし！お姉さん頑張っちゃうぞ！あ、でもとりあえずしばらくは待ってね」

「いいよ、作ってくれるなら。ただし何もせずぐうたらしてたら蹴っちゃうよ」

「ご褒美かな……？大丈夫、何より私がターンピック付けたいから！」

「なら僕媚びなくてよかったじゃん……………」

「やる気が出たからよし」

「あ、そう……………」

唯は鼻歌まで歌いはじめてご機嫌だ。僕は装備と装甲を外して素体に戻る。

「あ、そうそう。ライ、充電は大丈夫？」

「え？」

充電か。電池はどれくらいかな、と考えてみたら、60%、と返ってきた。

「あれ、わりと減ってる」

「充電が終わる前に起きちゃったんだね」

「そうみたい。充電しておこつと。ええと、コードは……………」

眩きながら充電くんの胸の蓋を開ける。ケーブルを伸ばして、端子を背中端子に挿そうとする。

「……………あれ、ささらない」

「ずれてるよ」

「そうなの？うーん、あんまりわからないな」

「挿したげる」

「お願い」

唯にケーブルを渡して、背中を向ける。

「いくよー」

合図と共にケーブルを挿される。その瞬間……………。

「ひにやつ!?!」

ぞくつ、とした感覚がお尻の辺りに走って、思わず声が出る。

「びっくりした。大丈夫なんだろうね、これ？」

そう言いながら唯の方へ振り返ると、すごく緩んだ顔をしていた。

「今の声、もう一回」

何を言うかと思えば。

「ダメ」

背中、ケーブルの刺さっているパーツを唯に触られないように体で隠す。



「ライがあんな声出すのが悪い」

「挿さったときにお尻の辺りがぞくつとしたら誰だつてああいう声出るよ」

「ほんとかなあー?」

「本当だつて。FAガールのそういうところ、なんか知らないの?」

「実は聞いたことあるんだよね」

「あるんだ」

「FAガールは皆、充電端子の辺りを触られたりすると気持ちよくなっちゃうんだつて」

「ええ……………」

「気持ちよくなるつて……………何?」

「充電くんに座る。」

「誰から聞いたの、それ?」

「友達に色んな子と住んでる子がいてね。その子たちのなかの二人に聞いたんだ」

「二人」

「誰だろう?というか、色んな子と住んでる?買ったのかな。」

「というか僕つて、どんな感じでここに来ることになったんだろ?」

「その友達のところ、なんでそんなにFAガールズがいるの?」

「聞いた話だと、FAガールのAIのデータ収集のために製造元のファクトリーアドバンスが色々な人に轟雷を送ったんだけど、起動したのがその子、あおのところにきた子だけだったんだつて。だから他のモデルの子も来て色々やってるらしいよ」

「そうなのか」

「あお?それつてまさか、アニメの主人公の源内あお?」

「つてことはここ、アニメの世界なんだ。というか唯つてあおの友達なのか。」

「えつと、僕はなんで唯のところ?」

「轟雷ちゃんが学校まであおについてきてるときがあつてさ。それがかわいくてかわいくて……………。で、あおに聞いたら家にもつというつていうからもう即突撃させてもらったの。さっきの話とか聞いてた

ら、ちょうど新しいモデルのテストを探してくれないかって言われてみたいでね。男性モデルもOKって話を聞いたらもう即紹介してもらったんだあ」

「そ、そうなんだ……………」

唯がどんどん早口になつてたけど、そういうことらしい。

「あ、そうだ思い出した。ライもそのうち、あおのこの子たちとセッションしてもらうことになるよ」

「そうなの？」

「それが条件の一つだったの。あおのこの子たちとセッションしたり普通に交流したりのデータが欲しいんだってー」

「え、それ大丈夫かな」

僕はたぶん突然変異みたいなものだろうし、データでバグ扱いされてないかな。

「大丈夫大丈夫。うちにももう1人くる予定だし」

「その子のデータは正常だろうから……………うん、大丈夫か」

「そういうこと。それよりさ、ライ」

「え？」

「次はこれ使おうよっ」

「それは……………」

エクステンドブースター。つまり。

「翔べ、漸雷！つてね」

「よおし！武器は？」

「ハンドガンからバズーカ、剣からナツクルまでなんなりと！」

「イチオシは？」

「やっぱこれだよね！」

そう言つて唯が掲げたのはライドカノン。バズーカ二つを繋ぎ会わせたもの。十字のシルエットを持つ

「よしてきた。じゃあそれとあと、小さめのマシンガンとリボルバー使いたいな」

「あら堅実」

「ロマン装備はとつておく！」

「なあるほど。よし、じゃあつけようか！」

エクステンドブースターを4つ、それぞれ両肩アーマーと両足後ろに。

マシンガンを右足横に。リボルバーを左足横に。

そしてライドカノンを右手に持つ。

「けっこう重いな」

これぞフル装備！って感じ。

セッションベースに乗って、セッションスタート。

「プレミアムアームズ・ガール、セッション！」

## 漸雷くん、翔ぶ

セッション開始。フィールドはさつきと同じ平原。

「……………ふふふふふふ……………漸雷強襲型……………マントは着てないけど強襲装備型だあ……………」

実はさつきから興奮が押さえきれない。まさか漸雷強襲装備で戦う時がくるとは思わなかった。

『ガールだけどね』

「うるさいやい」

唯はほつといて、ブースターを動かす。

肩のブースター、足のブースターをそれぞれ個別に。しっかりと動く。

……………よし、ブースター噴射！

ゴツ、とGがかかって体が浮き上がる。

『翔んだ、ク○ラが翔んだ！』

「立てよそこは。……………飛んでる、ほんとに」

さつき、地面をローラーダッシュしていたときとはまるで違う景色。

ブースターを吹かして加速するたび、感じる風と、体にかかるG。

『楽しい？』

「うん」

ほとんど生身で飛ぶって、こんな感じなのか。

『ブースターはセッションの時以外でも使えるらしいよー』

「マジで？」

いいの、それ。まあ飛べると僕は便利だけだよ。

『武器とかも使えるけど、威力はほとんどないんだって』

「そうなんだ……………」

安全対策はきっちりしてるよね、さすがに。

「さあて」

飛ぶのはいいけど、攻撃もできなきやね。

右手のライドカノンを構える。

目標は地面の的。

照準を定めて撃つてみると、すこし外れた位置に当たった。

「ん？あー、うん」

もう一度撃つてみて、わかった。

反動で空中姿勢がぶれてるんだ。

ライドカノンは無反動砲みたいだけど、かといって本当に無反動なわけじゃない。そして、エクステンドブースターはそのへんの微調整が難しい。

「まあ神経磨り減らすよりはマシかな……………」

説明書のストーリーだと、ステイレット系のほうがマシってレベルだったみたいだし。

それとも何か自動制御があるのかな。漸雷は複座だったような。ひよつとして、僕の疑問にときどき答えてくるアレが制御してるのかな。

……………今回は答えてこない。なんでだ？

ブースター制御、つと……………」

——ブースター制御、セミオートモード——

お、返ってきた。

セミオートか。僕の姿勢イメージに合わせて角度をオート調整してるってとこかな。

とにかく、反動があるならそれに合わせて撃ったほうがよさそうだ。

宿っているのは僕でも、アタマはメカ。だからか、反動計算などは自分であだからこうだとかすることもなく、答えが出る。答えがわかるなら、そのとおりにやるだけ。

そう考えながら、反動でのブレを補正して照準して……………発射。

今度は照準どおりに弾が飛んで、的を木っ端微塵に吹き飛ばした。

『ブルズアイー！』

「うん、大当たりかな」

飛び回りながらだところはいかなそうだけど。

マシンガンならどうだろう？

ライドカノンを地面に置いて、右足のマシンガンを持つ。  
軽く動きながら、まずは一発。ダブルバレルガンよりも反動は小さいかな。次、連射。連続して弾が飛んでいき、的とそのまわりが穴だらけになる。

フルオートで撃つとばらけるな。数発づつ、バーストで撃ったほうがよさそう。

『ライー』

「なに？」

急に唯が呼んできた。空中停止。

『バトルパーツ、LEDソード！』

「へあっ」

上から持ち手が実体化し、落ちてきた。

「わわっ」

慌てて高度を下げつつ、左手でキャッチ。そのまま着地。

「急すぎだった」

『いやあ、後から送れるのに気づいて試したくてさあ』

「もう」

僕も好きだけどさ、バトルネットワーク。

「ソード、かー」

送られてきたLEDソードは持ち手だけ。MSGのやつは、刃ごと押し込んでスイッチだったけど…使いづらそう。

「あ」

グリップにスイッチがある。右手に持ち変えてから、入れてみる。

「おおっ」

『この音、ワカってるうっ』

緑色の光刃が伸びた。ビシユウン、と音も出る。

「……………いい……………」

両手で正面に構える。

振り上げて、振り下ろすと、ブオン、と鳴って残像が走る。

「……………すき」

横薙ぎ、袈裟斬り、上段斬り。

「はー……………これ……………すきっ」

すごい。振つてて気持ちいい。

『ぐへへ……………浸つてますなあ……………』

「あっ」

唯のこと忘れてた。

『わかる。わかるよ。私も今、すごくFAガールになりたい』

「だよね!？」

『でもこのままライ見てたくもある』

「あう」

いつたい、どんな浸り方をしてたんだろう、僕。

「……………ええい、構うもんか、斬るぞっ!」

『やっちまえ!』

轟雷系は、足の方にも動力なさそうなローラーがついてる。プラモデルの足裏にもそれっぽいディテールがある。つまり、ブースターがある今なら。

的を正面に見据える。足を肩幅より広めに、ソードの先を左に向けて構えて、ブースターの向きを整える。

「行くぞっ!」

ゴッ、とブースターで急加速。的に向かって、急接近、右に振り抜く。勢いで回転しつつ滑って、止まる。

『行っただー!すごい!的の上半分が吹き飛んでる!』

「……………」

『やっばー!私も振りたい!』

「……………」

『ライ!』

「……………」

『ライ……………?』

「……………カ」

『カ?』

「カ・イ・カ・ン……………ッ」

『……………ライ……………いったんやめよっか……………』  
「えっ」